ISSN 2189－3349

国際言語文化

第５号

International Language and Culture

five issue

研究論文

アジアにおけるコミュニティ・エンゲージメント
－マレーシアの実例と Knowledge Transfer－ …… 影浦亮平
辰巳　遼　牛島　万　本間峰行
日本語教員養成課程の日本語教壇実習と外国人企業研修生の日本語学習
―日本語教員志望の実習生のメリットと学外から通う日本語学習者のメリット― … 中西久実子
井元　麻美
統語構造における PRO の局所性に関する一考察
――標示付けアルゴリズムとフェイズ理論による分析―― …… 福嶋剛司

研究ノート

プエルトリコにおける文化的ヒスパニック性　―人種・文化・アフロ性― …… 牛島　万
日本語運用力を測るプレースメントテスト作成の試み …… 白鳥　文子
篠原みゆき　大谷つかさ
サンヴィセンテ島民と日本人漁師の文化接触
―カーボヴェルデの「サイコー」な人たちは誰だったのか― …… 青木　敬
感情とメディア文化―グローバル時代のアイデンティティ …… 辰巳　遼

Articles

Community Engagement in Asia: Projects in Malaysia and Knowledge Transfer
…… Ryohei KAGEURA
Ryo TATSUMI　Takashi USHIJIMA　Mineyuki HONMA
How to co-ordinate successful learning for training Japanese teachers and learning Japanese by French speaking trainees who work for companies in Japan and : Merits for the learners of Japanese and demerits for the students who teach Japanese …… Kumiko NAKANISHI
Mami IMOTO
A note on the Locality of PRO : an analysis on Labeling Algorithm and Phase Theory
…… Tsuyoshi FUKUSHIMA

Research Notes

Cultural “Hispanicity” in Puerto Rico : Race, Culture and Blackness *“lo negro”*
…… Takashi USHIJIMA
Approaches for Effective Placement Testing for Measuring Japanese Performance
…… Fumiko SHIRATORI
Miyuki SHINOHARA　Tsukasa OTANI
Cultural Contacts between the Islanders of São Vicente and the Japanese Fishermen:
Who Were the people "Sayko" in Cabo Verde? …… Kay AOKI
Emotion and Media Culture : Identity in the age of globalization …… Ryo TATSUMI

国際言語文化学会学会誌　2019

国際言語文化　第５号

目次

研究論文

アジアにおけるコミュニティ・エンゲージメント
–マレーシアの実例と Knowledge Transfer– ・・・・・・・・・・・・・・・・影浦亮平
辰巳　遼　牛島　万　本間峰行　・・・1

日本語教員養成課程の日本語教壇実習と外国人企業研修生の日本語学習
―日本語教員志望の実習生のメリットと学外から通う日本語学習者のメリット―
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中西久実子
井元　麻美・・・15

統語構造における PRO の局所性に関する一考察
――標示付けアルゴリズムとフェイズ理論による分析――・・・・・・・・・福嶋　剛司・・・33

研究ノート

プエルトリコにおける文化的ヒスパニック性
―人種・文化・アフロ性―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・牛島　万・・・43

日本語運用力を測るプレースメントテスト作成の試み ・・・・・・・・・・白鳥　文子・・・55
篠原みゆき　大谷つかさ

サンヴィセンテ島民と日本人漁師の文化接触
―カーボヴェルデの「サイコー」な人たちは誰だったのか―・・・・・・・・青木　敬・・・65

感情とメディア文化―グローバル時代のアイデンティティ ・・・・・・・・・辰巳　遼・・・79

彙報・・・89
編集後記・・99

Contents

Articles

Community Engagement in Asia: Projects in Malaysia and Knowledge Transfer
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ryohei KAGEURA
Ryo TATSUMI
Takashi USHIJIMA
Mineyuki HONMA ・・・1

How to co-ordinate successful learning for training Japanese teachers and learning Japanese by French speaking trainees who work for companies in Japan and : Merits for the learners of Japanese and demerits for the students who teach Japanese・・・・・・・・・・・・・Kumiko NAKANISHI
Mami IMOTO・・・15

A note on the Locality of PRO : an analysis on Labeling Algorithm and Phase Theory
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Tsuyoshi FUKUSHIMA・・・33

Research note

Cultural “Hispanicity” in Puerto Rico : Race, Culture and Blackness *“lo negro”*
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Takashi USHIJIMA・・・43

Approaches for Effective Placement Testing for Measuring Japanese Performance
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Fumiko SHIRATORI
Miyuki SHINOHARA
Tsukasa OTANI・・・55

Cultural Contacts between the Islanders of São Vicente and the Japanese Fishermen:
Who Were the people "Sayko" in Cabo Verde? ・・・・・・・・・・・・・・・・・・Kay AOKI・・・65

Emotion and Media Culture : Identity in the age of globalization・・・・・・・・・・・Ryo TATSUMI・・・79

サンヴィセンテ島民と日本人漁師の文化接触
—カーボヴェルデの「サイコー」な人たちは誰だったのか—

Cultural Contacts between the Islanders of São Vicente and the Japanese Fishermen:
Who Were the people “Sayko” in Cabo Verde?

青木　敬

要旨

The islands of Cabo Verde are known as one of the oldest Creole areas in the world. It was originally discovered by the Portuguese in the mid-fifteenth century. Since their settlement, the Portuguese brought people from West Africa as slaves which made birth the concept of creole in Cabo Verde. The phenomenon of creole is a linguistic and cultural product surged through a dynamism of mixture of Whites and Blacks while colonization and black slave trade have begun. Thus, Cabo Verde became a heterogeneous society.

In the eighteenth century, before the abolishment of slavery, the port of Mindelo in the island of São Vicente has developed for its supplement of coal by the British. The port of Mindelo turned to an important meeting point of various people from a different background which eventually made Mindelo to a metropolitan city. Finally, in the 1960s, the Japanese fishermen were engaged in fishery based in Mindelo until the 1970s. During their stay, *koladera*, a Cabo Verdean musical genre, was in a fashion and a song called “Sayko Dayo” (= ‘awesome’, ‘superb’ in Japanese) was composed by a famous musician, Ti Goy, through cultural contacts between Japanese fishermen and the people of Mindelo.

The present report shows how Japanese fishermen were evolved in the terms of the creation of the song “Sayko Dayo” and examine who were the people “Sayko” by analyzing interviews that the author has collected during fieldwork. This study can show us how people of Cabo Verde creolize their cultures.

【キーワード】文化のクレオール化、文化接触、日本人漁師、サンヴィセンテ島ミンデーロ市

1. はじめに

クレオール語圏が世界に散在していることは Holm (1989) が示しているとおりだが、なかでも西アフリカ島嶼国カーボヴェルデ（図 1）は最古のクレオール地域のひとつとして知られている。黒人奴隷貿易の最中、混質性を兼ね備えた植民地生まれの産物（混血、混淆された言語と文化、植民地の動植物など）を特徴としてもつクレオールの現象が生じ、カーボヴェルデの場合、ヨーロッパと西アフリカ出身者など、じつに多様な人びとが共存したことによってクレオール社会が形成された。

無人島だったカーボヴェルデは、15 世紀にヨーロッパ人によって発見されたのち、大勢の西アフリカ出身の人びとが奴隷として連行され、ヨーロッパ人と混淆したのがその発端である。カーボヴェルデは黒人奴隷貿易の中継地として重要な役割を担った。次第に、ラテンアメリカ（とりわけブラジル）やアメリカ合衆国、ヨーロッパからさまざまな文化が逆輸入し、クレオールという「多様性」 (*diversity*) 、あるいは「雑種性」 (*hybridity*) をアイデンティティとして認識し始めるに至った。このアイデンティティをクレオール・アイデンティティと呼ぶ（青木 2017a）。

元来、クレオール・アイデンティティとは、マルティニーク島を中心としたカリブ海地域の知識人たちによって提唱された思想であり、アジア人やヨーロッパ人ではなく、その混質性を特徴としてもつクレオール人であることを表明するものであった（ベルナベ、シャモワゾー、コンフィアン 1997）。その一方、カーボヴェルデのアイデンティティを考えるうえで、アフリカ性を称賛すべきか、あるいはカーボヴェルデ性をアイデンティティの拠りどころとするのかという問題を解決する必要があった (Duarte 1999)。また、これまでポルトガルの海外領という位置づけであったカーボヴェルデ人としては、ポルトガル性も存分に秘めている。このように錯綜するアイデンティティのなかでカーボヴェルデの人びとは、カリブ海地域のように黒人と白人が生成した産物としての「クレオール性」 (*crioulidade*) に価値を見出しはじめた。そのため、島民の母語であるクレオール語を多くの言語学者は記述することに努めた (cf. Baptista 2002; Quint 2000; Veiga 2000)。

そして現在のカーボヴェルデは観光地へと発展し、上記した地域に加え、多くの中国人が生活必需品を揃えた店舗を経営し、さらには大学やカジノを建設しており、カーボヴェルデにおける中国の経済的影響は多大である。しかし、それよりも以前にカーボヴェルデ人と日本人とのあいだに文化的交流はあった。1963 年から 1973 年までのあいだ、大勢の日本人漁師が鮪および鮫漁を目的にカーボヴェルデ北西部に位置するサンヴィセンテ島へ入港したのである。カーボヴェルデ人と交流をもった日本人漁師は、大量の鮪と鮫を釣り上げ、漁師仲間のあいだで「最高だ」と声にしていた。カーボヴェルデの著名な音楽家である Ti Goy (1920-1991)（本名は Gregório Gonçalves）は、日本語の「最高だよ」という表現に因んで『Sayko Dayo』（「サイコーダヨ」と発音する）といううたを作曲するに至った。その後、『Sayko Dayo』[(1)] はカーボヴェルデの伝統的なうたとして受け継がれていったという背景がある（松田 2006a、2006b）。

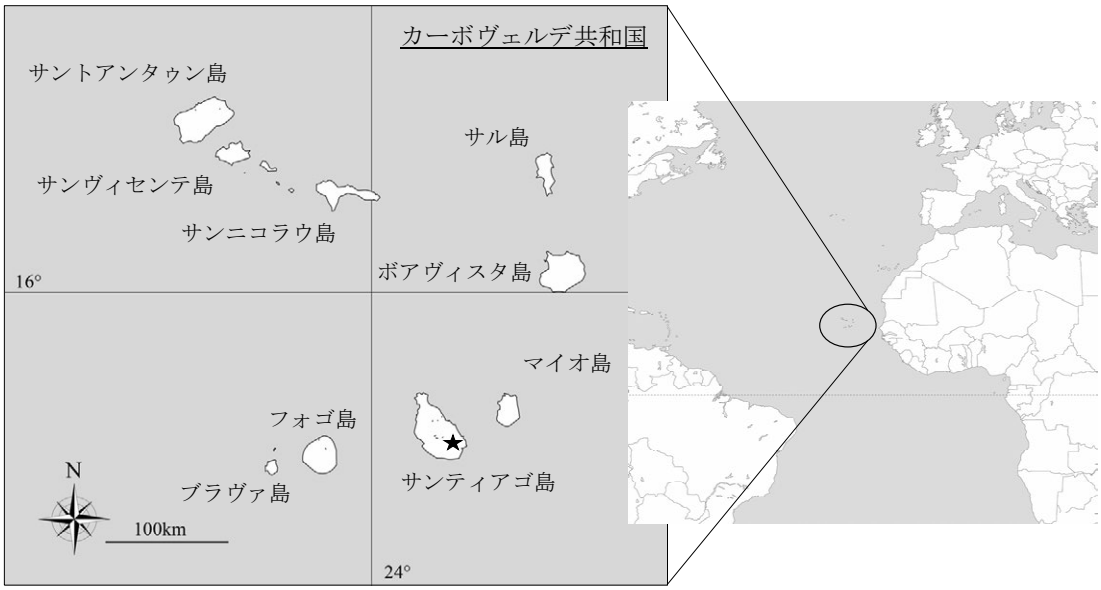

図 1. 西アフリカ島嶼国カーボヴェルデの位置

（作成者：青木敬）

2. 目的

本稿は 『Sayko Dayo』をめぐる日本人とカーボヴェルデ人の文化交流について実施した人類学的調査の結果を報告するものである。また、クレオール文化論を展開する本研究が問題にしていることは、両者が文化交流をもった結果誕生した『Sayko Dayo』がどのような背景のなかで作曲され、なにが、あるいはだれが「サイコー」（最高）だったのかを明らかにすることである。本稿ではそのためのデータを提示する。

また、『Sayko Dayo』がなぜクレオール文化として根づくことができたのか、クレオールではない事象がクレオールへと変換されていくプロセスを描くことが本研究の目的である。

3. 方法

調査期間は 2018 年 8 月 1 日から 9 月 8 日までの約 1 ヶ月間であり、調査対象地はサンヴィセンテ島の中心地ミンデーロ (*Mindelo*) である。ミンデーロでは以下のみっつの人類学的方法にもとづき、調査を実施した。

①『Sayko Dayo』にかんする住民への聞き取り調査

以前から継続的に交流を深めてきた幾人かのミンデーロ在住の知人や友人に『Sayko Dayo』についての情報について聞き取り調査をおこなうことから始めた。そのつながりにおいて、結果的に『Sayko Dayo』が誕生した当時の状況を知る重要人物にたどり着くことができた。

② インフォーマントへのインタビュー

①で示した重要人物のひとりはミンデーロ市民のあいだで“Paulo Chinês”[(2)]（本名はPaulo Martins）の愛称で知られており、かれは日本人とカーボヴェルデ人の混血である。なお、Martins 氏はポルトガル語を解したが、互いの会話はすべてクレオール語をもちいることにした。

Martins 氏をつうじて本調査の鍵となるよっつの重要な役割を果たした人びと、すなわち売春婦、案内役、音楽家、漁師にインタビューをすることに成功した。これについては本論で詳述する。

③ 伝統楽器カヴァキーニョをもちいた『Sayko Dayo』の習得

ミンデーロには楽器職人がふたりおり、そのうちのひとり、Luís Batista 氏からカヴァキーニョ（*cavaquinho*）を購入した。その理由は、より多くのモルナの楽曲を習得することのほかに、『Sayko Dayo』を Batista 氏より伝授してもらうためであった（写真 1）。

カヴァキーニョはスペインのレキント（*requinto*）、イタリアのキタッリーノ（*chitarrino*）に類似した弦楽器であり、その起源はポルトガルにある。植民地の影響によってポルトガルからブラジルへカヴァキーニョが伝わり、20 世紀に入ってからようやくカーボヴェルデに根づいた。これらみっつの地域間（ポルトガル、ブラジル、カーボヴェルデ）は、カヴァキーニョ以外にもさまざまな言語文化的かかわりにおいて結びつけることができ、ヨーロッパのポルトガル、南米のブラジル、そしてアフリカのカーボヴェルデはいずれも大西洋文化圏という地域的枠組みにおいて関係づけられる。カヴァキーニョもまた、これら 3 カ国における大西洋ネットワークをつうじて伝播され、現在ではサンバ（ブラジルおよびカーボヴェルデのサンバ）と民謡（ポルトガルおよびカーボヴェルデの民謡）においてリズムをつくるための重要な役割をもっている。しかし、カヴァキーニョの場合、その伝播は上記した大西洋文化圏に留まることなく、ハワイやインドネシアへ伝わり、それぞれウクレレ（*ukulele*）とクロンチョン（*kroncong*）へ変化した（中村 1988、マヌエル 1992）。

写真 1. 弦楽器カヴァキーニョをもちいて『Sayko Dayo』を伝授してもらっている様子

（撮影者：Luís Batsita、日時：2018 年 8 月、撮影地：サンヴィセンテ島）

4. サンヴィセンテ島の概要

サンヴィセンテ島の基礎情報は次ページのとおりである（c.f. 青木 2017a）。サンヴィセンテ島の大多数の人びとはミンデーロに居住している（地図 2）。ミンデーロには観光客や現地住民を惹きつけるラジーニャ (*Laginha*) と呼ばれる砂浜と標高 774 メートルのヴェルデ山 (*Monte Verde*) がある。表 1 をみると、サンヴィセンテ島が発見された年（1462 年）と入植された年（1793 年）のあいだにおよそ 400 年の相違がみられる。この理由は、カーボヴェルデがヨーロッパ人によって発見されて以来、すぐにプランテーションが開始できなかったこと、別言すればサン

表 1. サンヴィセンテ島の基本情報

面積	227km^2	政治	共和制
人口	概略70,000人	発見された年	1462年
主要都市	ミンデーロ *(Mindelo)*	入植が開始された年	1793年
言語	母語：サンヴィセンテのクレオール語	独立年	1975年
	公用語：ポルトガル語	主要港	ポルトグランデ *(Porto Grande)*
民族	クレオール（%は不明）	カーボヴェルデにおけるサンヴィセンテ島の位置づけ	文化都市
生業	漁業、観光業、農業	宗教	カトリック（%は不明）

ヴィセンテ島の土地がプランテーションをおこなうための条件が十分でなかったからである。

カーボヴェルデの人びとはクレオールであり、混血である。かれらにとってクレオール語は母語であり、意思疎通を図るためにもちいられる日常語である。また、ポルトガル語はカーボヴェルデの公用語であり、政治や新聞、学校教育でもちいられる。

ミンデーロがカーボヴェルデの文化都市と称される背景には、たとえば毎年カーニバルが開催されたり (Rodrigues 2011) 、カーボヴェルデを代表する歌手 Cesária Évora の出身地であったり、毎晩のように生演奏がおこなわれたり、なによりもアメリカ合衆国やヨーロッパ各地、中南米の色濃い影響を受けたことにある。

ミンデーロの重要な港であったポルトグランデ港（図 2）は、大西洋を航海していたイギリス船に石炭を再供給するために大発展を遂げ、ミンデーロはイギリス人だけでなく大勢の外国人が往来する国際色豊かな都市へと変貌した。したがってミンデーロという空間はカーボヴェルデの文化都市であるとともに、ミンデーロ市民はカーボヴェルデでもっともリベラルな人が多い。

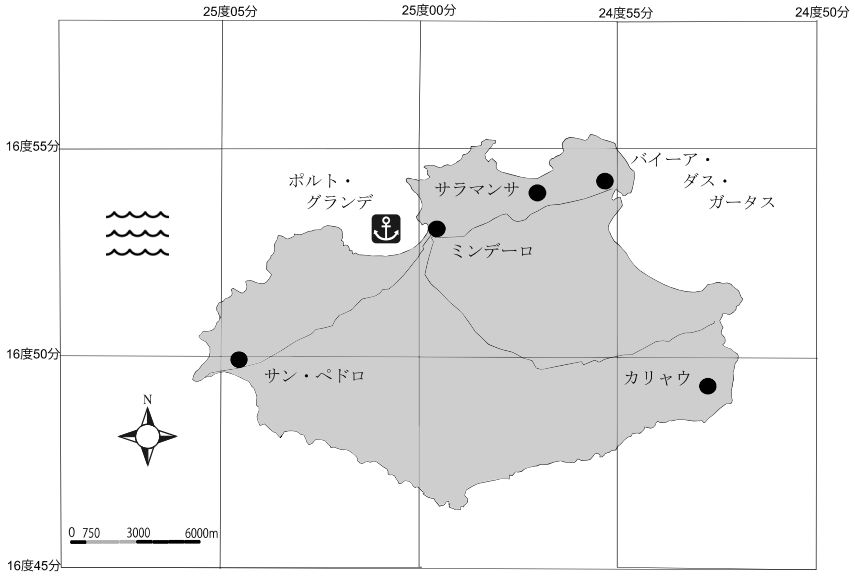

図 2. サンヴィセンテ島の地図

（作成者：青木敬）

写真 2. ミンデーロの中心部。右奥にみえるのがポルトグランデ港

（撮影者：青木敬、日時：2018 年 8 月、撮影地：サンヴィセンテ島）

5. インタビュー対象者の語り

まずは以下に箇条書き（順不同）で記しているように『Sayko Dayo』についての有益な情報を知り得る人に聞き取り調査をおこなった。

＜ミンデーロ市民へのインタビュー＞

- Paulo Martins（日本人とカーボヴェルデ人のあいだに生まれた中年男性。ポルトガル語を解するが、クレオール語だけを話す）
- Eduardo Évora（歌手 Cesária Évora の子息）
- Carlos Delgado（無職の男性。筆者が以前の調査中に同居していた 64 歳の男性。酒場で頻繁に演奏している）
- Amiro Faria（77 歳男性。60 年代、日本人漁師との関係により設立された漁業技術にかかわる会社の元社長）
- Alexandre Pacheco de Novais（80 歳男性。Congelo 社の元社長）

つぎに、本調査の鍵となる重要人物、すなわち①売春婦、②案内役、③音楽家、④漁師による語りを紹介する。

①＜売春婦の語り＞

筆者は Martins 氏が勤務する写真用品店を経営する Djibla 氏から『Sayko Dayo』にかんする調査をするならば、当時の売春婦にインタビューをすればよいことを教えてもらった。Djibla 氏は本調査における重要な資料をもつ男性である。かれは 60 年代の日本人漁師を写した膨大な写真

を販売しているからである。残念ながら、Djibla 氏の都合により写真を入手することはできなかったが、次回の調査で購入する予定である。

Djibla 氏が当時の売春婦にインタビューすることを勧めてくれた理由は、売春婦の相手が日本人漁師だったためである。そこで Djibla 氏は Martins 氏もまた、ミンデーロの売春婦と日本人漁師のあいだに生まれた子供だということに言及し、筆者 Martins 氏をつうじてかれの母親にインタビューを実施することに成功した。Martins 氏は父親に会ったことがなく、したがって日本語が話せないことについてインタビューをつうじて言及していた。かれの父親は 60 年代にミンデーロに入港した日本人漁師だったのである。

Martins 氏の母親は当時の状況について記憶に残っていることを快く語ってくれた。彼女の名は Maria Luz という。Luz 氏は「かれの名前なんて忘れてしまった。写真だってちぎって捨ててしまった」と言及し、Martins 氏の父親にかんしてよい印象がなさそうだったにもかかわらず、その語りは決して悲観的なものとは言い切れない部分もあった。なぜなら Luz 氏は当時を振り返りながら、「あの頃は景気がよく、ミンデーロの『黄金期』だった」と懐かしんでいたからである。

また、Luz 氏が売春婦として働いていた同時期に、歌手 Cesária Évora の姿があったという。下記に紹介している案内役によれば Cesária は 20 歳になってから多少のあいだ売春婦として働いていたという。Cesária の幼少期における人生観は父親が好きな音楽が身近にあり幸福感に満ちていたが、父親の死後、孤児院生活が始まってからは一変したのである（c.f. 青木 2017b）。このように、彼女が国民的歌手になるまでの道のりは険しく、売春婦として働いていた時代があったことは不思議ではない。上記している＜ミンデーロ市民へのインタビュー＞にある Eduardo Évora が Cesária の子息だが、かれは日本人漁師とのあいだに生まれた子供ではない。しかし、当時の『Sayko Dayo』についての情報や、母親である Cesária についての当時の生活を理解するうえで非常に重要な人物であった。

②＜案内役の語り＞

もっとも詳細な情報をもち、日本人漁師と最良の関係にあったのが案内役と呼ばれる人びとである。本調査では幸運にも、3 人の案内役に聞き取り調査を実施することができた。かれらは多少なりとも日本語を話すことができた。なかでも当時の状況をもっともよく知っていた案内役は、筆者に日本人漁師が通っていた酒場や Cesária が歌っていた酒場の位置を案内してくれた。かれはミンデーロの漁師関係者のあいだでは「キンちゃん」の名で、そのほかの市民には “Titiu” の名で知られており、「キンちゃん」は日本人漁師がつけた愛称だという。

これらの案内役はミンデーロで *cicerone* と呼ばれているが、この単語に対してよい印象をも

つ人と嫌がる人がいた。この語を嫌うものは *guia*、つまり「ガイド」という語を使用した。この理由については、当時の案内役が日本人漁師を売春婦の元へ連れていき、このことが現在では悪印象であったからだと思われる。「キンちゃん」は笑顔で「僕らはポン引きだ」とさえ日本語で語った。しかし、実際の案内役たちのなかでこの語を気に留める者はいなかった。したがって、ミンデーロの街を日本人漁師に案内していた役目をもっていたという意味で、本稿では「案内役」 (*cicerone*) と訳している。

当時、多くの案内役が少年であった（写真 3）（おそらく全員であるが確証はできない[(3)]）。少しでも多くお金を稼ぐために、かれらは裕福で羽振りがよかった日本人漁師を案内したのである。今でこそミンデーロは観光地として有名だが、60 年代はカーボヴェルデが独立する前であり、インフラなど発展途上にあったため日本人漁師を案内する場所は限られていた。当時、案内役は日本人を①日本人の宿泊先、②日本人がミンデーロ滞在時にともにする売春宿、③夜中に娯楽を愉しむための酒場へ主に案内していた。夜中は、売春婦も案内役も日本人漁師とともに酒場へ赴き、生演奏（とくに舞踏コラデーラ *koladera*）を聴いていた。日本人は酒場にいる人たちに気前よく酒をご馳走し、羽振りが非常によかったことからミンデーロ市民による印象がよく、その考えは現在もなお続いている。興味深いことは、日本人漁師が特定の売春婦とだけ過ごしていたことである。

写真 3．1972 年にまだ少年であった案内役を撮影した貴重な一枚。

（撮影者：青木敬、日時：2018 年 8 月、撮影地：サンヴィセンテ島）

③＜音楽家の語り＞

上記した酒場で生演奏をしていた人びとは、職業としての音楽家ではなく、音楽を演奏する人たちのことを指していることに留意したい。現在のカーボヴェルデでは、音楽家として生活を営むことができる人は少ない。したがって音楽を職にしているかどうかを標準に定めず、音楽を酒場で演奏していた人びとのことをここでは「音楽家」（作曲家、作詞家、歌手を含む）と呼ぶ。

本稿の冒頭でも記したように、Ti Goy は 60 年代の著名な作曲家のひとりだった。Cesária は売春婦の仕事をしていた時期があり、10 代から酒場で歌い、作曲家 Ti Goy と交流を深めたのちにミンデーロで最初のラジオ局 “Radio Barlavento” でレコーディングを始めた。これは Cesária が 20 代の頃である。つまり、デビュー前の Cesária（フランスでデビューを果たしたのは 1988 年であり、著名になったのは 1992 年）が歌っていた同じ空間で日本人漁師たちはコラデーラの演奏を愉しんでいたのである。残念ながら、この時代の音楽家の多くは他界しているためインタビューを実施することは不可能である。しかし、その時代の生活を知っている人がいるとすれば、それは 60 歳代になった当時まだ少年だった案内役である。したがって、本調査における重要なデータは案内役にあるといっても過言ではない。

『Sayko Dayo』は *Cesaria Evora Radio Mindelo*（『ラジオ・ミンデロ―初期録音集』）に収録されている。このアルバムは日本版としても売られているが、『Sayko Dayo』にかんして「日本のマグロ漁船がカーボ・ヴェルデに行っていたことから生まれた」（長嶺 2009）としか記されておらず、歌詞の訳すらない。したがってここでは『Sayko Dayo』の歌詞を紹介し（https://www.youtube.com/watch?v=WpagQx8JRrk でライブ映像を参照）、本研究にかかわる問いを明確にする。

歌詞中に表現される「サイコーダヨ」のグループとはだれなのか。調査の結果、じつにさまざまな説が浮上した。諸説存在する理由はミンデーロ市民によって解釈が異なるからである。一説によれば、日本製の時計 SEIKO（セイコー）を身につけていた漁師たちがミンデーロ市民に差し上げたからだという。「セイコー」と「サイコー」の発音が類似しており、SEIKO は「最高な物」と意味するようになった。また、日本人からみて「サイコー」は売春婦であると言及する者もいた。なかでも、「サイコー」だった人は体格がよく、上品な香水の香りを漂わせたうえに、綺麗な洋服を着ていた売春婦であるとじつに具体的に指摘する人までいた。あるいは羽振りがよかった日本人漁師自体が「サイコー」だったと解釈する人もいる。

なお、カーボヴェルデ北西部（サントアンタゥン島、サンヴィセンテ島、サンニコラウ島）でおこなった聞き取り調査によれば[(4)]、「サイコー」はカーボヴェルデのだれもが日本語の「最高」の意味として理解している。

しかし、これまでの資料のなかでまったく注目されてこなかった箇所がある。それが歌詞中の 2 番で表現されている「サイテー」 *(Saitê)* である。これはいうまでもなく、「最高」に対する「最低」の意味であり、カーボヴェルデ人は日本語と同様の意味として認識している。上記した「サイコー」に対して、「サイテー」な人は汚らわしい洋服を着た裸足の売春婦を意味すると語る者までいた。

『Sayko Dayo』	**『サイコーダヨ』(最高だよ)**
Brinca sabe so no so	楽しみ方を知っているのは僕らだけ
Passa sabe so no so	時間の過ごし方を知っているのは僕らだけ
Dansa sabe so no so	踊り方を知っているのは僕らだけ
Quêl d'grup sayko dayo	僕らサイコーダヨのグループだけが知っている
Saitê ka t'entra li	サイテーな奴らはここに入れない
Ês ka tem nada pa fazê li	奴らがここですることは何もない
Entra ê so nos so	入れるのは僕たちだけ
Quêl d'grup sayko dayo	僕らサイコーダヨのグループだけが入れる
Sayko sayko sayko sayko dayo	サイコー、サイコー、サイコーサイコーダヨー

（訳：青木敬）

④＜漁師の語り＞

漁師の語りについては、日本人の漁船で協働していたカーボヴェルデ人漁師と日本人漁師のふたつのアスペクトがあることを記さなければいけない。問題は当時、日本の漁船で働いていた人たちの多くが亡くなっていることである。現在、日本人漁師たちはおそらく 80 歳から 90 歳過ぎの高齢者である。日本でひとりでも日本人漁師にインタビューを実施することが可能であればそれは貴重なデータとなり得るが、現在、模索段階である。

一方、カーボヴェルデ人漁師にかんしても同様のことがいえる。カーボヴェルデの場合、小島であることから人を探すことに時間はかからないが、60 年代の漁師の多くが亡くなっていた。そのなかで、ミンデーロ在住の漁師、通称 Ping Pong （「ピンポン」）にインタビューを実施することに成功した。かれは日本語を話し、日本漁船で日本人との協働により習ったという。しかし、『Sayko Dayo』については案内役のように知っているわけではなかった。かれはあくまでも漁師であり、漁船での仕事について淡々と語った。ここでは紙幅の都合上、かれの語りの記述を省略する。

60 年代にミンデーロで漁師として働き、その後もミンデーロに居住し続けた日本人漁師がいる。かれの名は「アベさん」であり、ミンデーロでは空手家の「アベ」として知られている(5)。当時の状況について「アベさん」が日本人歌手の松田氏とのインタビューにおいて当時の様子について語っている。以下、貴重な資料であるためその一部を引用する。

> 「何歩か歩けばすぐ日本人って感じでした。日本船が入ってくると仕事が増えるし町も潤ったんで、本当に『サイコー』だったんです。その頃の日本人は金もよく使いましたしね。他の国の船の連中は相手にされないくらいでしたね。あの歌［“Saiko Dayo”］には『最高な日本人だけ入って来い』っていう意味があるんですよ」（松田 2006b: 17）

「アベさん」によれば、「サイコー」な人はお金の浪費が激しかった日本人たちを意味している。事実、案内役の「キンちゃん」と「アベさん」の証言は一致している部分が多い。「サイコー」がだれを指していたのか――これについては、今後さらに考えを深めたい。

6. おわりに――クレオール文化としての『Sayko Dayo』

本稿で論じた日本人漁師とミンデーロ市民のあいだに起きた文化交流が示してくれることは、まさしくクレオール化 (*creolization*) という現象の一端であった。異文化をもつ人びとが出逢ったときに交流し結果的に混淆が生じる、ということは人類が歴史のなかで幾度となく繰り返してきたことである。しかし、植民地支配によって形成されたクレオールの人びとは、あるいは黒人奴隷貿易の繁栄によって生まれた「産物」がクレオール語、クレオール文化の起源であるのならば、混淆することそれ自体が自然なことであり、絶えず自我を変貌し続けてきたその形態を特徴としてもつ。そして本稿で取り上げた事例は、植民地支配の文脈においてではなく、経済的なかかわりにおいてであった。日本人漁師との交流をもたらし、その結果『Sayko Dayo』がカーボヴェルデの新たな伝統文化へと発展したことは、クレオール化のメカニズムを理解するうえで極めて貴重かつ重要な事例であるといえる。

最後に、『Sayko Dayo』がなぜクレオール文化として根づくことができたのかについて論じ、筆を擱くことにする。まずは、当時著名であった作曲家 Ti Goy の存在が大きいということを理解しなければならない。かれは、60 年代に形成し流行し出したカーボヴェルデの音楽ジャンル、コラデーラを多く作曲し、現在ではそれらの曲が伝統的なうたとして継承されている。『Sayko Dayo』もかれが作曲したコラデーラのひとつであり、カーボヴェルデの島民が日本語の「最高」という意味を理解していることは、いかに Ti Goy の楽曲が普及していたかがうかがえる。また、

ミンデーロがカーボヴェルデにおいて文化都市として位置づけられていることも忘れてはならない。ミンデーロはカーボヴェルデの群島のなかでも外国の多様な文化がもっとも入り混じった地域である。別言すれば、これまでにミンデーロ市民はクレオール文化が構築されていくうえで、柔軟に外的要素を取り入れてきたのである。もうひとつは、日本人漁師に対するミンデーロ市民の印象がよかったということも重要であろう。好印象を抱いた異国の人たちがもつ文化に対して快く迎え入れるという態度があったように考えられる。カーボヴェルデ人の考え方のひとつに、モラベーザ (*morabeza*) がある。これはホスピタリティにかんする単語でクレオール語独特の表現である（c.f. 青木 2017）。とりわけ外国人との接触が顕著にあったミンデーロ市民は、モラベーザの強い精神を受け継いでいたのであろう。このようなミンデーロの都市がもつ港湾都市として発展を遂げた歴史背景、外国人を受け入れてカーボヴェルデ人を海外へ送り出すミンデーロ市民のモラベーザの精神、そして最後に文化都市とした栄えた結果、大勢の音楽家がミンデーロにいたこと、これらの要因が『Sayko Dayo』を創造する契機となり、ミンデーロ市民は自文化として取り入れたのである。それが現在では伝統的なうたとして認知されていることは、カーボヴェルデ人にとっても日本人にとっても多大な文化遺産であろう。

謝辞

本研究は、日本科学協会の笹川科学研究助成による助成を受けたものです。フィールドワークを実施するにあたってお世話になったインフォーマントの方々にとりわけ感謝致します。

注

(1)松田は‘Saiko’と綴っており、クレオール語で表記する場合、ときに‘Saiko’と表記されることがある。しかし本稿では、この曲が収録されているアルバム“Cesaria Evora Radio Mindelo”に記載されている綴りに従い、‘Sayko’と表記する。

(2)「中国人パウロ」を意味するが周囲の人びとが差別的な意味をもちいているようには感じなかった。

(3)すでに亡くなった案内役が多い。

(4)この調査は 2013 年 9 月から 2014 年 3 月までに実施した際のデータにもとづいている。

(5)現在はミンデーロに住んでいないため、筆者が直接インタビューすることはできなかった。

参考文献

青木敬 (2017a) 『カーボ・ヴェルデのクレオール—歌謡モルナの変遷とクレオール・アイデンティティの形成—』京都大学アフリカ研究シリーズ 018 号、松香堂書店。

青木敬 (2017b) 「歌謡モルナにおける *Cretcheu* と *Amor* の意味変容」『国際言語文化』Vol. 3, pp. 1-16.

エマニュエル・ピーター (1992) 『非西洋世界のポピュラー音楽』（中村とうよう訳）、ミュージ

ック・マガジン。
中村とうよう (1988) 『大衆音楽の真実』第 2 刷発行、ミュージック・マガジン。
ベルナベ、ジャン／シャモワゾー、パトリック／コンフィアン、ラファエル (1997) 『クレオール性礼賛』（恒川邦夫訳）平凡社。
松田美緒 (2006a) 「“saiko”—海を渡ったクレオールの歌」『未来』1 月号、No. 472、pp. 22-23、未來社。
松田美緒 (2006b) 「“Saiko”—陽気なディアスポラ」『未来』2 月号、No. 473、pp. 16-17、未來社。
Baptista, Marlyse (2002). *The Syntax of Cape Verdean Creole: The Sotavento Varieties*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
Duarte, Manuel (1999). *Caboverdianidade e Africanidade*, Praia: Spleen.
Holm, John (1989). *Pidgins and Creoles*, Volume II, Cambridge: Cambridge University Press.
Quint, Nicolas (2000). *Le Cap-Verdien: Origines et Devenir d'Une Langue Métisse*, Paris: L'Harmattan.
Rodrigues, Moacyr (2011). *O Carnaval do Mindelo: Formas de Reinvenção da Festa e da Sociedade Representações Mentais e Materiais da Cultura Mindelense*, Lisboa: Alfanumérico.
Veiga, Manuel (2000). *Le Créole du Cap-Vert: Étude Grammaticale Descriptive et Contrastive*, Paris: Karthala.

＜ディスコグラフィ＞

長嶺修 (2009) 『セザリア・エヴォラ／ラジオ・ミンデロ—初期録音集』（解説文）アオラコーポレーション。

＜インターネットサイト＞

Cesária Évora がパリで披露した『Sayko Dayo』のライブ映像：
https://www.youtube.com/watch?v=WpagQx8JRrk

国際言語文化学会『国際言語文化』第 5 号

平成 31 年 3 月 18 日　印刷
平成 31 年 3 月 18 日　発行

編　集　　国際言語文化学会事務局
発行所　　〒615-8558　京都市右京区西院笠目町 6

印　刷　　株式会社　北斗プリント社

International Society of
Language & Culture